

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
恵深主、爾高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降三日葬受
われらをくるしみよりときたまえり、
我等苦釋給
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我生命復活主、光
えいはなんぢにきす。
榮爾、に歸す。

【 神現祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢがイオルダンにせんをうくと時
主、爾、洗、受、時
き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた
聖三者敬拜、顯
り、けだしちちのこえなんぢをしょうして
蓋父聲、爾、證
しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた
至愛の子名、聖神鳩、か形
ちにあられてことばのたしかなるをしめ
顯、言、確、示
せり、あらわ、あ、れてせかいをてらし
現、世、界、照

しハリスト オスか みよ 、 こう え い は なんぢに き
 神 光 榮 爾 歸
 す 。

【 復活のコンダク 第8調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 だ い じん じ な る しゅ よ 、 なんぢ は は か よ り ふ く
 大 仁 慈 主 爾 は 墓 復
 か っ して 、 し せ し も の を お こ し 、 ア
 活 死 者 お 興
 ダムを ふ く か っ せ し め た ま え り 。 エ ヴァ は なん
 復 活 給 え り 爾
 ぢ の ふ く か っ を た の し み 、 せ か い の は て
 復 活 樂 世 界 極
 は なんぢ が し よ り お き た る を い わ う 。
 爾 死 お 興 祝

【 神現祭のコンダク 第4調 】

いま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 しゅよ 、 なんぢはこんにちせかいにあらわあ
 主 爾 今日 世界 現
 れ 、 なんぢのひかりはわれらにしるされた
 爾 光 我 等 印

り、われらなんぢをうけみとめてうとお
我等爾承認歌
お。ちかづきがたきひかりよ、なんぢき
近難光爾來
たりなんぢあらわれたまえり。
爾現給

司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう}讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ}人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい}願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行^なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
^{しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖神聖勇毅聖

じょう せい の もの よ、 われら を あわれ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

なる じょう せい の もの よ、 われら を あわれ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き、 せい なる じょう せい の もの よ、 われら を
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あわれ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 洗礼祭後の主日 第1調 】

司祭) つし き しゅうじん へいあん
慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) プロキメン、しゅ われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま
プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

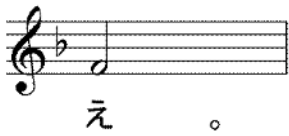
しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、
主 我 等 爾 頼 如
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) ぎじん しゅ ため よろこ さんえい ぎしゃ かな
義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、
主 我 等 爾 頼 如
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) しゅ われらなんぢ たの ごと
主よ、我等爾を頼むが如く、

な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま
爾 憐 我 等 垂 給



【 アポストロス 使徒經 302 端 ティト書 2 章 11~14、3 章 4~7 節

224 半端 エフェス書 4 章 7 節~13 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{たつ} ティトに ^{しよ} 達する ^{よみ} 書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^こ 子 ^{かみ} ティトよ、^{おんちよう} 神の ^{しゅうじん} 恩寵、^{すくい} 衆 ^{ほどこ} 人に ^{もの} 救 ^{あらわ} を ^{われら} 施 ^{ふけいけん} す ^{せぞく} 者は ^{よく} 現 ^{はな} れて、^{みづか} 我等 ^{せい} に ^ぎ 不 ^{けいけん} 敬 ^{もつ} 虔 ^{いま} と ^{いのち} 世俗 ^{わた} の ^{のぞ} 福 ^{ところ} と ^{ふく} を ^{およ} 以 ^{おおい} て ^{かみ} 今 ^{われら} の ^{きゆうしゆ} 世 ^{こうえい} に ^{あらわれ} 生 ^ま を ^{おし} 度 ^{かれ} り、^{おのれ} 望 ^{えら} む ^{たみ} 所 ^{ぜんこう} の ^{ねつしん} 福 ^{もの} 、^{きよ} 及 ^{ため} び ^{しか} 大 ^{われら} なる ^{きゆうしゆ} 神 ^{かみ} 、^{おんちよう} 我等 ^{じんあい} の ^{じんあい} 救 ^{あらわ} 主 ^{とき} イ ^{かれ} ス ^{われら} ス ^{おこな} ハ ^{ところ} リ ^ぎ ス ^{わざ} ト ^よ ス ^{あら} の ^{すなわち} 光 ^{おのれ} 榮 ^{じれん} の ^よ 現 ^よ を ^よ 待 ^よ つ ^よ こと ^よ を ^よ 教 ^よ う。 ^よ 彼 ^よ は ^よ 我 ^よ 等 ^よ の ^よ 爲 ^よ に ^よ 己 ^よ を ^よ 與 ^よ え ^よ たり、^よ 我 ^よ 等 ^よ を ^よ 凡 ^よ の ^よ 不 ^よ 法 ^よ より ^よ 贖 ^よ いて、^よ 己 ^よ の ^よ 爲 ^よ に ^よ 選 ^よ ば ^よ れ ^よ た ^よ る ^よ 民 ^よ 我 ^よ 等 ^よ の ^よ 爲 ^よ に ^よ 己 ^よ を ^よ 與 ^よ え ^よ たり、^よ 我 ^よ 等 ^よ を ^よ 凡 ^よ の ^よ 不 ^よ 法 ^よ より ^よ 贖 ^よ いて、^よ 己 ^よ の ^よ 爲 ^よ に ^よ 選 ^よ ば ^よ れ ^よ た ^よ る ^よ 民 ^よ 善 ^よ 行 ^よ に ^よ 熱 ^よ 心 ^よ なる ^よ 者 ^よ を ^よ 潔 ^よ め ^よ ん ^よ 爲 ^よ な ^よ り。 ^よ 然 ^よ れ ^よ ど ^よ も ^よ 我 ^よ 等 ^よ の ^よ 救 ^よ 主 ^よ 神 ^よ の ^よ 恩 ^よ 寵 ^よ と ^よ 仁 ^よ 愛 ^よ と ^よ の ^よ 顯 ^よ れ ^よ し ^よ 時 ^よ 、^よ 彼 ^よ は ^よ 我 ^よ 等 ^よ が ^よ 行 ^よ い ^よ し ^よ 所 ^よ の ^よ 義 ^よ の ^よ 功 ^よ に ^よ 由 ^よ る ^よ に ^よ 非 ^よ ず、^よ 乃 ^よ 己 ^よ の ^よ 慈 ^よ 憐 ^よ に ^よ 由 ^よ り ^よ て、^よ 重 ^よ 生 ^よ の ^よ 洗 ^よ 、^よ 及 ^よ び ^よ 聖 ^よ 神 ^よ の ^よ 復 ^よ 新 ^よ を ^よ 以 ^よ て、^よ 我 ^よ 等 ^よ を ^よ 救 ^よ え ^よ り、^よ 聖 ^よ 神 ^よ は ^よ 即 ^よ 神 ^よ 之 ^よ を ^よ イ ^よ ス ^よ ス ^よ ハ ^よ リ ^よ ス ^よ ト ^よ ス ^よ 我 ^よ 等 ^よ の ^よ 救 ^よ 主 ^よ に ^よ 由 ^よ り ^よ て、^よ 豊 ^よ に ^よ 我 ^よ 等 ^よ に ^よ 注 ^よ げ ^よ り、^よ 我 ^よ 等 ^よ が ^よ 彼 ^よ の ^よ 恩 ^よ 寵 ^よ を ^よ 以 ^よ て ^よ 義 ^よ と ^よ せ ^よ ら ^よ れ ^よ て、^よ 望 ^よ に ^よ 循 ^よ いて、^よ 永 ^よ 遠 ^よ の ^よ 生 ^よ 命 ^よ の ^よ 嗣 ^よ と ^よ 爲 ^よ ら ^よ ん ^よ 爲 ^よ な ^よ り。

(比較用 口語訳) 子テトスよ、すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。

誦經) ^{けいてい われらかくじん おんちよう あた たまもの りよう したが ゆえ} 兄弟よ、我等各人に恩寵の與えられしは、ハリストスの賜の量に循うなり。故

^{い たか のぼ とりこ とりこ ひとびと たまもの あた そのぼ} に云えるあり、高きに登り、擲者を擲にし、人々に賜を與えたりと。夫れ登れりとは、

^{かれ ま ち もつともした ところ くだ しめ あら くだ もの かれすなわちしょてん} 彼が先づ地の最下なる處に降りしを示すに非ずや。降りし者は、彼即諸天の

^{うえ のぼ もの こ ぼんゆう み ため かれ あた もの しと よげんしゃ} 上に登りし者なり、此れ萬有を充たさん爲なり。彼が與えし者には、使徒あり、預言者

^{ふくいんしゃ ぼくしおよ きょうし せいと ぜんび つとめ こと おこな} あり、福音者あり、牧師及び教師あり、聖徒を全備せしめ、服役の事を行ひ、ハリス

^{たい た われらみなしん かみ こ しし ちしき いてい せいぜん ひと な} トスの體を建てて、我等皆信と神の子を識る知識との一なるに、成全の人と爲るに、ハ

^{まつた せいちよう りよう いた およ} リストスの全き成長の量に至るに迫る。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にも上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

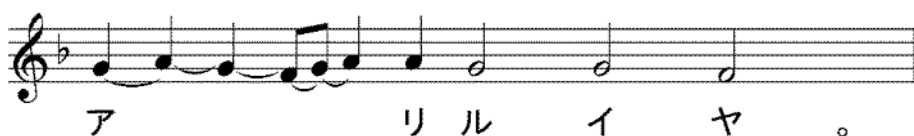
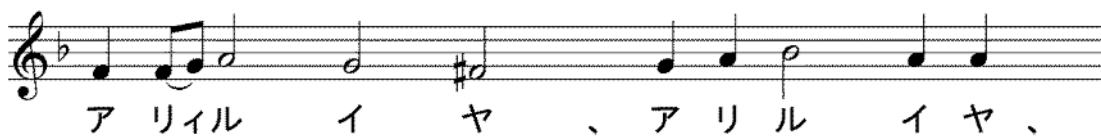
【 アリルイヤ 洗礼祭後の主日 第5調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた} 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋 我言う、慈憐は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書6端 3章13~17節

マトフェイ福音書8端 4章12~17節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
爾神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主光榮爾歸光榮



は なんぢに き す 。
爾 歸


司祭) 謹^{つつし}みて聴^きくべし、彼の^か時^{とき}、イイスガリレヤよりイオルダンに^{きた}来^きり、イオアンに^つ就^こきて、之^{これ}より洗^{せん}を受けんと欲^{ほつ}す。イオアン彼^{かれ}を止^{とど}めて曰^{いわ}く、我^{われ}爾^{なんぢ}より洗^{せん}を受^うくべきに、爾^{なんぢ}我^{われ}に就^つくか。イイス答^{こた}えて彼^{かれ}に謂^いえり、今^{いま}姑^{しば}く許^{ゆる}せ、蓋^{けだし}我^{われ}等^{われら}は是^かくの如^{ごと}く凡^{およそ}の義^ぎを盡^{つく}すべし。是^こに於^{おい}て之^{これ}を許^{ゆる}せり。イイス洗^{せん}を受け、直^{ただち}に水^{みず}より上^あげるに、視^みよ、天^{てん}彼の^{かれ}ため^{ため}ひら^{ひら}かみ^{かみ}神^{しん}の神^{はと}鳩^との如^{ごと}く降^{くだ}りて、其^{その}上^{うえ}に臨^{のぞ}むを見^みたり、且^{かつ}天^{てん}より聲^{こゑ}ありて云^いう、之^{これ}は我^{われ}の至^し愛^{あい}の子^こ、我^わが喜^{よろこ}べる者^{もの}なり。

(比較用 口語訳) そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところにて、バプテスマを受けようと言われた。ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいてになるのですか」。しかし、イエスは答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がった。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

司祭) 彼の^か時^{とき}イイスはイオアンが囚^{とら}われたりと聞^ききて、ガリレヤに去^されり、ナザレトを離^{はな}れて、ザヴロン^{およ}及び^{さかい}ネファリム^{うち}の境^{かいひん}の内^{きた}なる海^{ここ}濱^おのカペルナウム^{よげん}に來^きりて、此^こに居^おりたり、預^{よげん}言^ご者^{しや}イサイヤ^{もつ}を以^いて言^いわれしこと^{かな}に應^{いた}うを致^{いわ}す、曰^{いわ}く、ザヴロン^ちの地^{かいひん}、ネファリム^ちの地^{かいひん}、海^{かいひん}濱^ちの路^{みち}にイオルダン^{そと}の外^あに在^いる異^{いほう}邦^くのガリレヤ^{くら}、幽^ざ暗^{たみ}に坐^おする民^{ひかり}は大^みなる光^しを見^ち、死^{はな}の地^な及び^{およ}蔭^{かげ}に坐^ざする者^{もの}に光^{ひかり}は輝^{かが}けり。是^{これ}よりイイス始^{はじ}めて教^{おしえ}を宣^のべて曰^いえり、悔^{かい}改^{かい}せよ、蓋^{けだしてん}天^{ごく}國^{ちかづ}は邇^{ちかづ}づけり。

(比較用 口語訳) イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海べの町カペナウムに行つて住まわれた。これは預言者イザヤによつて言われた言が、成就するためである。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ、暗黒の中に住んでいる民は大なる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼつた」。この時からイエスは教を宣はじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づ

いた」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

The image shows two staves of musical notation in G major (one flat). The first staff contains the melody for the first line of lyrics, and the second staff contains the melody for the second line. The lyrics are in Japanese and are written below the notes. There are repeat signs at the end of each line of music.

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ